大村市教育大綱
（案）

令和七年三月　大村市

「大綱の趣旨」

教育大綱は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律」第1条の3に基づき、地方公共団体が策定するものです。

本市は、幕末に多くの偉人を輩出した藩校「五教館（ごこうかん）」に代表されるように、昔から教育に力を入れてきました。五教館は、平等の精神を尊び、武士以外の一般の人々も学ぶことができ、当時の価値観においてのインクルーシブ教育とも言える、他に類を見ない藩校でした。

近年、国際化、情報化、少子高齢化等に伴い教育を取り巻く環境が目まぐるしく変化してる中、多様性を理解・尊重する教育の必要性が高まっています。

そこで、大村市は、五教館の精神を受け継ぎ、「**ＯＮＥ　ＯＭＵＲＡ～一人はみんなのために、みんなはひとつのために～**」をキーワードに、**家庭・学校・地域が連携協力**し、多様な個人それぞれが幸せや生きがいを感じながら、生涯を通じて学ぶ教育を推進するための方針を、大村市教育大綱として策定します。

「大綱の期間」

大綱の期間は、令和七年度から令和十一年度までの五か年間とします。

「大綱」

五教館の名称が、五倫道を教育の綱領としたことに由来していることにちなんで、大村市の教育に対する五つの道しるべ（方針）を策定し、その実現に向けた取組を推進していきます。

一　健全な心身をはぐくむ環境づくりの推進

あらゆる教育の基礎となる家庭教育の充実を図るため、家庭教育力の向上をサポートし、生きる力、命の大切さ、他人を尊重する気持ちなど、健全な心身をはぐくむことができる環境づくりを推進します。

二　すべてのこどもが安心して学ぶことができる環境づくりの推進

ヤングケアラーや貧困など、こども達を取り巻く様々な課題に対する理解を促進するとともに、経済的支援の充実などにより、社会情勢・家庭環境などに左右されず、すべてのこどもに等しく学ぶ機会を与えることができる環境づくりを推進します。

三　人間力をはぐくむ学校教育の推進

社会の流れが急速に変化していく中、自らの意志や考えを持って変化に対応し挑戦できるよう、主体的で能動的な学びを推進するとともに、分野を問わず一芸に秀でることを支援することで一人ひとりの自己肯定感を高めるなど、人間力をはぐくむ教育を推進します。

四　一人ひとりに寄り添う教育環境づくりの推進

多様化する教育ニーズに対応するため、家庭・地域との連携の強化や、教員の配置や働き方等の環境整備を推進することにより、一人ひとりに寄り添ったきめ細やかな支援を行うことができる教育環境づくりを推進します。

五　生涯学び続けることができるまちづくりの推進

市民が生き生きと暮らすことができる社会を実現するため、スポーツや文化活動、地域の伝統行事など、多様な学びの形を支援し、様々な世代がコミュニケーションをとりながら、こどもも大人も学べる環境をつくることで、誰もがふるさとを愛し、生涯学び続けることができるまちづくりを推進します。

ONE OMURA

「一人はみんなのために、みんなはひとつのために」

石井 筆子（いしい ふでこ）

女子教育を進める傍ら、女性の人権確立を目指し、大日本婦人教育会の設立に尽力。アメリカで開催された万国婦人倶楽部大会には、かつて華族女学校教師時代の同僚だった津田梅子とともに、日本代表として出席した。
帰国後、障害児教育に生涯をささげ、障害児教育の母と呼ばれる。

楠本 正隆（くすもと まさたか）

大村藩勤王三十七士の一人として倒幕から明治維新に活躍。明治新政府では、行政官として長崎府判事、新潟県令、東京府知事などを歴任し、日本初の国立市民公園の白山公園を開設するなど、特に近代的な都市づくりに貢献した。
後に国会議員となり衆議院議長を務めた。

長与 専斎(ながよ せんさい)

長崎医学校の学頭に就任後、遺欧視察団に参加。帰国後、内務省衛生局の初代局長となり、伝染病予防や上下水道の整備、近代医療制度の確立、医学の普及などに努めた。
「衛生」という言葉の生みの親。

渡辺 清（わたなべ きよし）

大村藩勤王三十七士の中心人物として活躍し、戊辰戦争においては、大村藩隊新精隊を率い出兵。西郷隆盛の信頼が厚く、新政府軍の参謀として活躍。新政府軍の西郷隆盛と旧幕府軍の勝海舟による江戸城明け渡しの会談にも同席するなど、新政府軍で重要な立場であった。
明治維新後、福岡県令、福島県知事、貴族院議員などを歴任。

渡邉 昇（わたなべ のぼり）

幕末の倒幕運動に活躍。特に坂本龍馬に協力し薩長同盟に尽力するなど、倒幕派の各藩との連携に奔走。長州の桂小五郎とは兄弟弟子であった間柄であり、その関係性を活かして薩長同盟成立にも尽力した。
維新後、大阪府知事、会計検査院長を務めた。
日本を代表する剣客の一人として、近代剣道の普及にも貢献。